

大和文學

第一集



大和文學 第一集 目次

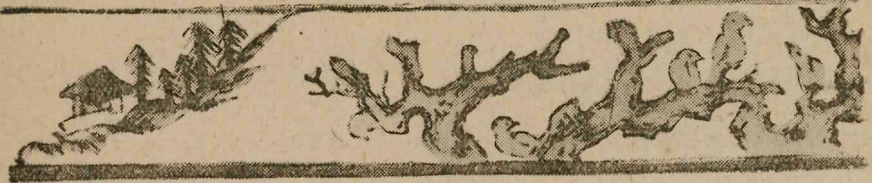
みやらびあはれ	保田與重郎	(4)
スタンダール	鈴木治	(78)
飛鳥をおもふ	釋 迢空	(30)
輕の蓮池	神西清	(39)
詩 不可知	田中克己	(28)
歌 砂丘	前川佐美雄	(46)
句 秋	阿波野青畝	(66)
表紙	三原實	

天平寫經生のなりはひ	松本樞重	(68)
諸を食つた話	中村幸彦	(71)
短歌と空想	吉村正一郎	(56)
生ぬるい青春	池田小菊	(51)
傳統について	服部正己	(48)
冬 彼岸	椿 伴夫	(62)
朱 引く	長 沖一	(113)
絶 筆	上 司小劍	(122)
こんと・ばりえて		(27)
投稿選評(短歌・詩・俳句)		(124)
投稿規定		(130)
編集後記		(129)

不可知

田中克己

港には澤山の船が入つて積荷に忙しい
海の見える高臺の林の蔭に
けふ出帆の二本檣帆船に乗るひとと
その戀人とが話してゐる
多分、いつまでも忘れずにとか



また會ふ日の豫定を話してゐるんだらう
しかし外洋には白い波頭がたえず見え
また水平線の向ふにはこの帆船を覆へす
颱風の潜んでゐることを二人は知らないのだ
この林を形成する橄欖の木に巣くふ鳥たちが
それを知つてあはれと鳴いてゐるのを
ふたりは一時の離別をかなします
たゞの奏樂と聽いてゐる――。



投稿選評

詩

田中克己選

敗戦の時にはわたしは河北省で太行山脈のふもとに兵隊としてゐたが二ヶ月後には北京と天津とを往來する地方人になつた。

このころになると久しぶりに詩のことを考へる機会も與へられたが、また數ヶ月して内地に歸還すると、正式に詩人に戻つた證據に、人ごとに異口同音にこれからの詩はどうなるか、との試問を與へてくれた。中々むづかしい問題のやうだが、

「これからの詩」と限定するところに難點があるので、私は詩のあり方はいついかなるときでも一つだと信じてゐる。

軍閥も情報局もなくなり、思想統制もなくなり、出版の自由が許されるいまとなつては、しかしいくらか詩人の歌ひ方も變つて來ることと思ふ。

戦争中詩と稱せられた宣傳文が通用しなくなつただけでも、大變な變

りやうと感ぜられるに相違ない。しかし詩人、特に新進の若い詩人が歌

ひたいことを、聲のかぎりうたつてゐるかどうか。わたしはこの點に關し何か疑問を感じないではゐられない。

今年度の「大和文學」の再刊は、若い詩人たちが、その歌ひたいまゝを表し出すに絶好の機会と思ひ、心から喜んでゐると、思ひがけず、選者の任を與へられた。

原稿の集りはかなりあつたので、夏目、汗をふきふきゆつくり拜見したが、前にのべた要望からいふと、聲のかぎりを出してうたつてゐるとは云ひがたい氣がするのが残念である。

詩はきれいなことを好むが、いはゆる通俗な詩境をうたふだけでは詩人の本分は盡されまい。

戦後の紙不足の時代としては、詩書の發行も相當に多く、わが國ばかりではなく、歐米の詩人の紹介も

はれてゐる。

これらの先輩に劣らぬ刻苦が必要と思ひ、本文への掲載を次の機會に待つこととしたが、應募作品の中で、すぐれてゐたものとして、大上敬義氏の「湖國抄」と松江玉翠氏の「龍安寺の石庭」だけをこの選評欄を借りて、あけて置きたい。

湖國抄

大上敬義

道もながれも
ゆふぐれは一段とかたむき
音もあぶくも
たゞみづうみにすひこまれる

山や木立にかぎられた
まつ毛のしづく、ひとつの世界
水のおもてにうかびくる
魚族のなげきは風に立つ

つちくれはつちいろに
みづうみはみづいろに

ぬれたなゝめのひかりにくれる
うつむきがちなふるさとのかほ

ひらまの雲は見えなくなり
月のないよるがきて
沛然と
みづうみは立ちあがる

龍安寺の石庭

松江玉翠

京都龍安寺の石庭に黙して坐る
一本も無く 一草も無し
石と砂の構成である バックは
低い白壁の瓦屋根のついたものであ

る
程よい粗密に 大小の石が 僅か
節氣のない その庭は 只 静閑
みつめる眼も 頭腦も 凡て沈静
寂たる視野の中に 靜かに配置され
た石が
徐々に 動くではないか
さびた庭の隅から 光りがさして

見はる まなこを 指導する
眼は

一面の灰色から みどりを感ずる
やがて白緑から群青に
強い緑青の色も ほのみえて
朱色が あらはれる
おゝ 晴やかな黄色が
そして 大海の碧が 開ける

暮明きた 拍子木は何時なつたやら
それは
庭ばかり眺めた 眼が 視野を高め
たから
低い塀を越えて 彼方の空を望んだ
偉大なる 環境である

山の石庭作者の意圖は こゝにある
低い塀は防波堤である
波うちきわの 石庭に
大空大海の濤は躍動である
怒濤は いどんで しぶきは岩に
陽の光りは五彩にわかれ
虹のそり橋を構成する

直線と曲線の 程よい配置は

美しき リズムを生み ハーモニー
を出す
風一陣
大海のその景色は
たちまちに 化して
そこは深山の谷の底

石庭は 溪谷の岩に 場面はかはる
直線に立つ竹の竿をとほして
樹木が茂り 遙かに見えぬ空の色
瀧の音さへ 感ぜられて
池大雅の 山水畫が 現出する
偉大なるかな

夢はさめて そこはもとの
静閑なる 龍安寺の石庭
石庭作者の魂の物語り
石庭は 靜かに 私の心は
平靜である
いのちをこめた製作は
現實を越えたものである。

大上氏の作は「雪」もよかつたが「湖國抄」の方が特によかつた。對象も美しく、ことばのえらみ方も適當で、いますし明確に把へてゐるもらへてれば本文として掲載すべきだと思つた。

松江氏の作品は女性とは思へぬ程力強く石庭のありさまを寫し出してゐられるが、結末になつて力がぬけ讀者を失望させるうらみがあつた。詩のむづかしさはとりわけこの邊りにひそんでゐるやうに思ふ。

次回には二氏をはじめとし、今回作品を寄せられなかつた人々から多くの力作を見せてもらへるものと思ふ。そのときには優秀な作品を、選評欄でなく本文に掲載し、讀者も讀者とよもこれを讀ましてもらへるのを楽しみにしてゐる。

投稿選評

俳句

阿波野青畝 選

寺田無餘子

朝涼や誦經しづかに惜み
終ゆ

仕方なく戻す嫁女と墓參

大いなる松にかこまれ門

涼し

這ふ蟻にまかせ給ひて地

藏尊

(評) 僧侶の境涯しぜんに現はれてをる。四句を併せ讀めば、それぐに長所がある。殊に私は誦經を惜み終ゆる、その心持の妙致を願みたい

武田無餘子

沙彌二人作務のはじめの
水を打つ

一睡の旅の晝寝のよき枕

御佛に命あづけて大晝寝

(評) これも僧侶の句。あてがはれた枕を、よき枕と感謝する旅僧の法悦か、私をつゝんでくれる。

森田湖月

そくばくの微をならせる
味喰の壺

錦木の花や小鼓しめ直す

(評) 錦木の花のやうな、人目たない小さな緑の花が、ここには強く印象され、しかも清穏な雰圍氣を保たしめてゐる。

興谷芳春

橋の戸の月うらとなる河
鹿かな

山の端に北斗傾く河鹿かな

(評) 作者の住む吉野の山深き、河鹿の鳴く頃、殊に夜景にひたつてみて、その實感は一入と思はるゝ。

栗山朝陽

涼しさや青田につゞく松
の馬場

(評) 松の馬場を添じた爲に青田の平凡を破る。行手に涼風萬斛の精舍あるを想はば、心自ら軽くならう。

奥西エイ女

白れんのそよぎに昏さたよへる

中巻秋華子

稻こぎの音のしづまる月明

藤川ひさし

玉音を賜ひし年を忘れめや

上田宇都羅
たゞ一つ大き團扇を新の上
辰己蝸牛

合客の身の上ばなし海苔椿る
辻 徹

菊活けて朝の授業は愉しめり
中巻秋輝子

月かゝる山のこなたに睡を焼く
藤川ひさし

炎天の面だましひとなりゆけり
梅雨の月一枚雲をとらへけり

父逝きて二十三年星涼し
島本鹽城

父逝きて二十三年星涼し
西川 優

虹かなし雲居の君の眼路になく
平井桂子

おだやかに脈博はあり花柘榴
古川悦子

おもふ事暫し忘れて梅の道
松村楢一

辨當をつかへば久米の初雲雀
水 鶏

編集後記

日本人が初めて文化的な國家を築いたのは大和の地であり、日本文學の最初の芽はここから生れた。即ち大和は常にこの國の文化を論ずる者にとつて、先づ考へられる地である。

その後文化の中心は、大和から京都へ、京都から東京へと政治の中心の移行と相重んで轉移して行つて、現在大和は昔日の文化を傳へる地に過ぎない。然し過去の歴史が示すやうに、政治の中心地にのみ文化が榮えただけでよいのであらうか。否文化の中央偏在は決して何時までも健全な社會の發展とは言えない。この國が精神文化の優れたものたるためには、ひとり政治の中心地のみならず僻遠の地にも地方特色豊かな立派な文化が、一狭い地方に閉ぢこもらずに、その風土的特色を生かしつつ廣く全國に普遍性を持った文化が、地方の人々の努力によつて生れなければならない。大和文學會はこゝろ云ふ、京地から生れたのである。随つてその機關誌である大和文學は決して地方的なものの即ち大和の人々だけの所謂郷土誌でない。編集に當つては特にこの點に留意したつもりである。

これは實を言へば第二集と言うべきであるが、今度養徳社の好意によつて本誌が發行されることになつたのを機會に、大和文學會本來の立場にたしかへり上述の通り郷土誌的な殻を除いて全國的なものに飛躍せしめたので敢て第一集としたのである。

大和文學は大和の人々のものではあるけれど、廣く全國の文化人に開放したい。編集者は全國の文化人から關心を持たれ、玉稿の寄せられる事を望んでゐる。又特に新人の擡頭を望んでやまない。大和文學は喜んで新文化人の登龍門とならう。『よい原稿が集まつたら續々と第二集以下の刊行を實行したい。決して刊行豫定に拘泥しないつもりである。全國の文化人に切に御援助御寄稿を希求する次第である。』

編集委員

田中克己 瀧井芳次
保田與重郎 吉岡武雄
前川佐美雄

書籍「大和文學」の要件は左記へ

奈良縣丹波市町養徳社内

大和文學編集部

大和文學 第一集	定價 四十五圓 (〒一・二〇) (留六・二〇)
昭和二十二年十二月五日印刷	昭和二十二年十二月十日發行
編集者 大和文學會	奈良縣丹波市町柚ノ内 天理圖書館内 瀧井芳次
發行者 岡 島 善 次	奈良縣丹波市町川原城 會員番號A一二五〇一五
印刷者 岡 島 善 次	奈良縣丹波市町川原城 天理時報社
發行所 株式會社 養徳社	本社 奈良縣丹波市町川原城 京都市中京區船場藥師室町西入
配給元 日本出版配給株式會社	東京都神田區深路町一丁目九

大和文學

第二集



新刊小説と隨筆

船山馨著 忘却の河 長篇小説 定價 八〇〇圓
 尾崎士郎著 人生劇場 殘俠篇 長篇小説 定價 九〇〇圓
 芹澤光治良著 情 長篇小説 定價 八〇〇圓
 藤澤桓夫著 星は見てゐた 長篇小説 定價 八〇〇圓
 宮本百合子著 女の靴の跡 隨筆 定價 八〇〇圓
 向坂逸郎著 疑い得る精神 隨筆 定價 九〇〇圓

大阪 難波 高島屋出版部

送料各十圓

禪月大師の生涯と藝術 小林太市郎著 定價 一〇〇〇圓
 短歌風土記 大和の巻 特裝 吉井勇著 定價 一〇〇〇圓
 隨筆會津八一著 定價 一〇〇〇圓
 伊東忠太 法隆寺 定價 四〇〇圓
 谷崎潤一郎 吉野葛 定價 六〇〇圓
 瀧田青陵 考古學入門 定價 八〇〇圓
 未永雅雄 池の華 定價 三〇〇圓
 金子大榮 雜文 定價 九〇〇圓
 西堀一三 藝道名錄 定價 一五〇圓

大阪市北區隨上町 東京日本橋小舟町 創元社

新刊優良圖書雜誌

學生參考書並專門書
 地圖 元陸測 五万分 地形圖 二万五千・二十万分
 新日本都道府縣別地圖帖
 附 全國市町村字名大鑑
 新日本・世界掛圖分縣其他各種

堂々 駁
 八〇四一 濱北 諸北橋齋心市阪大★
 〇〇七三 局本 角六町原河市都京★
 八八四三 辰奈 本橋通條三市良奈★
 五三四三

能の演出研究 (名稱八曲の演出を説き、その見所聞き所を指示す) 三宅 襄著 定價 一〇〇〇圓
 延年資料 (能樂研究に資すべき古傳、諸處能の新資料を蒐む) 本田安次者 定價 一〇〇〇圓
 大百句 (能に關するエッセイ集) 野上豊一郎著 定價 一〇〇〇圓
 能 解 (隨想集) 木村素衛著 定價 一〇〇〇圓
 無縁佛 (さくら文庫の第一輯) 渡邊一夫著 定價 一〇〇〇圓
 近一 蕃薇は生きてる (さくら文庫) 山川彌子枝著 定價 一〇〇〇圓
 一刊 近代文學ノート (さくら文庫) 西脇順三郎著 定價 一〇〇〇圓
 東京都千代田區 能樂書林 神田神保町三ノ六 勝本清一郎著

大和文學 第二集 目次

表紙

三原 實

英雄ジョナサン・ワイルド

フィールディング 阿部知二 (4)

切支丹と大和

新井トシ (45)

(詩) 老いたるわれをして――

録谷嘉道 (50)

日本歴史の挿繪

吉村正一郎 (52)

生 寫

保田與重郎 (56)

(歌) 斑鳩の里

吉田恵弘 (70)

浪漫主義の世界

鈴木 治 (72)

ちがつた世界

富永牧太 (89)

おしやべり

田中克己 (93)

女と煙草

池田小菊 (104)

人間になりたい願ひ

リラダ 浅見篤 (119)

投稿規定

(103)

編集後記

(128)

後に宇津保をひろげた。この宇津保は舊林森太郎氏所蔵、近世初期寫、堂々たる装幀で、俊陰の巻だけが大卷五巻、殊に繪は丹青絢爛目の醒むるよきな逸品で、外人にもつてこいの見ばえである。そこで第一巻の部を、なるべく地文と繪とが一緒に出るように少、勢よくさつと机上に延べた、しかし地が長くて繪まではとどまかなかつた。ところが妙なことに客はこの平假名交りの文章を一目見るなり

「オー、ビュエテフル、アラビック！」

と嘆聲をあげた。さあ事である、そろ／＼こんがらがらるなと思つたから、も一と延ばし延ばしてみたらがまだ繪が出ない。客の毛むくじやらかな倍ほどの手が巻く手をおしとめ、そして

「これはアラビックである」

となほも強要する。氣が氣でないが、思ひ切つてくりのべ、繪が半分でたところ

「ノー、これはジャバニーズです」

とほつとする。ところが客は繪がみえたとして納得しない。

「これがアラビックではないならば、汝はこれを

讀まねばならない」

と地の文章を毛の生えた人指し指で上下にこすつ

て言ふ。少々論理が變だとは思つたが仕方がないから汝も人指し指ですなほに行を押しながらやすい地をすらくと讀む。

「ハッハッハッハ」

頓狂な聲をたて、客はアラビックなんかどこ吹く風かといつた調子で繪をのぼしてゐる。

既におわりのように筆者は圖書館に職を奉ずるものであるが、圖書館といへば古今東西に互る典籍をあつめて整頓し閱讀の用に供してゐる。その奥の奥のところは素人には容易にわからない世界である。そのわからない世界からときどき出てきては講演だの參觀者だのにお目見えする。そして十年一日のように上のような出来ごとをくりかへしてゐる。しかし、それはただやむを得ずにくりかへしているのでもなければ、道楽や酔興からでもない。こんなわからない縁のほい世界を一寸でも五分でも世間の表面までつながらせたい願念からに外ならない。が、果して何時の日かそれがつながる時節はくるのであらうか。それはつながらる日はこない何時までもイロニーで終るのだ、とハイネは言うのである。

この頃吉川幸次郎博士の「學問のかたち」といふ本を讀んだら、翻譯のためばかりでなく外國語



おしやべり

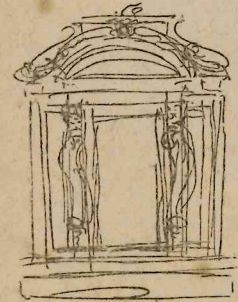
田中克己

西田一郎のことでつて。え、私どもの伯父のひとり子です。従兄になりますのよ。伯父たちはいま〇〇に居りますから、そちらへおゐでになつたら。

はあ、おゐでになりましたの。そしてこちらのことを聞かれましたつて、どうなんですの。伯父たちは元氣にしておりましたでせうか。なんしろこんなご時勢ですものね。あちらは人情が悪くて困つてゐるつて話ですけど、どうでしたでせうか。

さうでございますか。年寄ふたりだけでさびしがつてるとは存じながら、こちらもちつとも行く機会がないものですからねえ。向ふのいふ通り、ペーピン——終戦のときまでは

というものは學ばねばならない、ことば自體が民族を知るに必要な要素であるからという意味のことばのべてあつた。たとへ何はなくとも、間ちがつた記述であつても、ことばさえあればそれによつてどうでも何物かは到達しえられるとばかりに古代に向つて、ことばという梯子をかけて登つていつた昔のフィロロダ（文獻學者）たちのことが想ひだされて、非常に愉快であつた。だが思へばそのことばの修得だけにさへ人々は人生のどれだけ多くの時間を費してゐることかしのい。まして翻譯のための修得であるならばこれ又何時の日か眞體に殺到する日が望まれよう。こゝにおいて自分はハイネの斷定に左袒するのであるが、それにも拘らず、縁の遠い世界を切斷する勇氣をもち合せないのである。



北京と申しましたが、今ではペーピンつて名に歸つちやつたんですのよ——そのペーピンでのに皆さんのことでしたら、存じてゐるのは私どもだけでございますから、それではお話し申上げますわ。

でも何からお話し申上げたらいいんでせう。一郎にさんが復員して來たのは九月の中ごろでしたか。召集はその年の三月でしたかしら。へえ、召集になつたのはあの東京大空襲の翌日だつたんですの。お宅もその時お焼けになつたんですか。それからつとと消息をお聞きにならなかつたつて。ごもつともですわ。その翌日から御疎開、にいさんの方は召集で、すぐ中國へ行つ

ちまつたんですものね。

九月の十六日でしたかしら、父の勤先から電話がかゝつて来て、にいさんがすぐ見えるからとのことでしたけど、十分ほどしたらやつて来ましたわ。え、父の勤先と社宅とはすぐ近所なのですよ。その時のにいさんは見違へるほど太つて、笑くぼがついてましたわ。でも顔はまつ黒で、見られたもんちやありませんの。それに來て挨拶がすまないうちに、お湯をわかつてほしいといつて、庭にっ、立つたまゝで、お湯がわくと、私たちをあつちへやつて、服や下着をすつかりぬいで、着がへをしましたの。何でも軍隊では虱や蚤がうんとゐるんですつて、ひまなときにはそれをとるのが楽しみの一つだつたさうですけど、みな殺しにしたわけですわね。

おみやげにもつて來たのが飯盒にいつばいのお砂糖と饅節——軍隊には變なものまであるんだつて感心しました。ご存じのやうに内地で召集されたのに、どうして現地で除隊したのとたづねると、答へが癪にさはりましたの。八月十五日の終戦の時には、山の中にゐたのですけど、すぐ鐵道沿線へ出て來て、警備してゐるうちに、噂さが傳つて、ペーピンや天津の在留日本人はみな暮しにこまつて、女たちは饅頭——マントウつて中國人のご飯がはりにするメリケン粉のパンのや

があんなにどし／＼昂進することも豫想がつかなくつたので、のん氣でしたわ。インフレつていへば、さきほどから申上げてゐるマントウが終戦のころは一個十圓位でしたかしら、そのまへは一圓でしたのよ、それがみる／＼百圓ぐらゐまで上つて行つたんですのよ。さあいまはいくらしますかしら、六七千圓ぐらゐぢやありませんか。

その日からにいとさんと同居がはじまつたわけですの、子供のところから久しぶりなので變は變ですけど、お互ひに大して氣兼ねいりませんしそんなに遠慮するたちでもないんですけど、退屈なのは困つたらしいですわ。なんでも軍隊では「起床！」の號令がかゝると、あとは就寝ラツバまで働きづくめなんですつて。軍隊生活にやつと慣れちやつたあとなので困つたらしいですよ。お臺所のお手傳ひを母に申し出てことわられますし、朝起きても蒲團をたゝんちまふと、することがないと見えて、庭に出て軍隊體操なんかやつてましたが、そのうちに智慧を出して、外へ新聞を見に出かけるやうになりましたの。

日本人は必要以外の外出は差控へろつて申し合せで、父のやうに勤先の用事のある者以外はみな家にとぢこもつてゐなけりやならないんですけど、にいさんは中國の服を着ると、

うなものですの、永くゐるとご飯よりおいしくなりますのよ、そのマントウ三個で貞操を賣つてゐるつてことを聞いて、何とか助けてやらうと思つて部隊長に願ひ出たんですつて。部隊長も馬鹿ね、そんなことでお許しを出して除隊さすなんて。そんなことをいふものですから、あたしも腹が立つて、「にいさん、あんたはマントウを幾個もつて來たの」

つてきてやりましたのよ。軍隊ぼけつていふけど、ほんとに兵隊つて馬鹿がそろつてゐるんですわね。でもあたしたちの引揚げる頃になると大分こまる人たちも出て來て、内地の言葉でなら、バンバンさんも大分出たらしいんですけど、あたしまでがそんなことになるなんて本氣に心配して來たところが、腹が立つてたまんなかつたわ、ねえ。どこでバンバンつてどういふ意味かご存じ。バン二個とかへことつて意味なら、にいさんの饅頭三個とをつくりですけど、馬來語かフィリッピン語だつて本當ですか。

まもなく父が勤め先から歸つて來ました。會社は當時、接收されかけてゐて忙しかつたのですけど

「すぐひまになるから、碁の相手でもしてゐろよ」
つて、これがまあ歡迎の辭でしたの。終戦と同時に米や炭の配給がうんとあつたので、當分困りませんし、またインフレ以外にはニュースが入りませんので、家ぢうで傾聴しましたのよ。野坂參三が歸國して凱旋將軍のやうに歡迎されてる様子だとか、日本では今年度の産米では三分の一が餓死するとか、中國新聞の見出しからいかに悲觀的なものばかり拾つて來てたやうな氣がしましたけど、本當にのつてたんでせうね。

餓死のことは本氣で信用して、あとで引揚げの命令が出た時、

「僕が歸れば、食ひつぶしが一人ふえるし、歸らねば、僕に分だけ他人のお腹に入つてくれる」
なんて云つて父に笑はれてましたの。新聞を信用するなんて、馬鹿の骨頂ぢやありませんか。この頃、ことに榮養失調の人も見かけなくなつたんで、いよくにいさんの馬鹿に愛想がつきますわ。

その外に何を話しましたつけ。日本が共和制になるとか、陛下が御退位になつて、皇太子さまが御即位になるなどとも

云つてましたやうな気がしますわ。

そのうちにいさんの隊のときの上官だつたつて人が二人見えましたの。父からウィスキーをすゝめられて、

「西田さんには隊では上官でしたが、これからは先輩として萬事指示を受けます」

なんて云つてましたわ。二人とも中尉だつたとかで、軍隊口調がとれずにゐましたが、二等兵だつたにいさんに指示を受けるも白々しいぢやありませんか。でもこれで手がかりがいつたのか、にいさんはよく遠くまで出かけるやうになりましたの。

朝御飯を食べるとすぐ飛び出して、夜まで歸つて来ません。歸つて来てたづねると、したことのあらましを云ふこともありますが、あんまりしつこくたづねるのも變ですし、あたしはまたそのころ一寸、他のことで大變だつたものですからくはしいことは知りませんけど、にいさんが歸つて来なくなつたのはこの連中とおつきあひの結果ですわ。うちは内二區といつてベービンの内城の西南の方にあつたんですけど、にいさんはよく東の方へ出かけて行つてたんですわ。お金ですか、さう不自由してゐる様子もありませんでしたわ。お書は大抵そとで食べてるんですけど、炒麵、焼そばですか――

て、目が舞ふやうですの。もとゆきつけだつた映畫館のまへに立止つたり、甘栗屋をのぞきこんだりしてゐるうちに、やうやく双塔寺のそばまで来ましたの。あの隣りかの料理屋に馬車がとまつて、着飾つた女のひとがモーニングの男に手をとられて降りるのは、聞かないでもわかる通り婚禮の披露なんですのね。みてゐて敗戦國民のこと以外に、あたしわけがありません、胸がいたくなるほど羨ましかつたわ。ご免なさいね。わけはちよつと話せませんのよ。

それからしばらくして、にいさんが蒼くなるやうなことが起つたの。重慶軍の下士官か何かと行きちがつて、何かいはれたんですもの。まつ蒼になつて聞きかへすと、どうやら道を尋ねられたらしいので、すぐ

「不知道」

知りませんつて答へて、逃げてしまひましたけど、にいさんがどんなに中國人をつくりに見えるか、あたしが證明者ですわ。

それで裏みちへぬけて、まあともかく西單市場まで行きましたの。はじめからの約束では、映畫を見るでなし、たゞ本を見たいつてことでしたから、市場の中の古木屋へ連れて行つてやらうとのことでしたの。古木屋は澤山あつて、日本の本が山ほどならべてありましたのよ。外出を遠慮するなんて

でも二三百圓したでせうに、歸つて来てもひもじさうな様子もしてないでしたものね。

そのうちにあたしも退屈で耐らないところへ、あたし自身のことがあつて、にいさんに一度そとへ連れて行つて、つて頼んでみましたの。にいさんは大分考へてから、姑娘の服装をしたらつて條件つけましたの。まさかモンペでもないでせうが、洋装も駄目なんですつて。御近所をたのみまはつて借りて来て、つけて見るとよく似合ふんですつて。それで早速、お伴して出ましたの。出がけに日本語を話さないことつて条件をまたつけますから、困りましたわ。中國語なんて一三三四しか出来ないんですもの。それで英語で話すことにしましたの、あたし子供のころシンガポールで育つたんでせう。英語ならまあ／＼話せるんですから、やむを得なけりや、英語をつかふことにして、なるべく物をいはいないことにきめましたの。

家から出るとすぐ、西長安街つて、東京ならどこにあたりますか、昔の日本橋の通りみたいなところへ出ますの。貧乏な買賣人そつくりの恰好をしたにいさんと、怪しげな姑娘のあたしと、大變な一組ですのね。あたしはそれどころでなく、久しぶりに外に出たものですから、なにもかも珍しくつ

嘘ちやありませんか。それとも中國人の方でも日本語の本を買ふのでせうか。岩波文庫などみな一冊五十圓でしたわ。あたしが買ったのはスタンゲールの「赤と黒」。あなたお読みになつて？ 面白いわね。さう、ちやいまの内地の相場より安いくらゐだつたのね。

にいさんは本屋の掌櫃的ともう友だちになつてゐて、

「太々か」

つて訊かれて、ちがふといつたら、

「愛人か」

つていはれたつて得意さうにいふのよ。男つてどうしてあゝ自惚れ強いのでせう。ぞつとするわ。だつてあたしそのころ好きな人があつたのよ。あら、どうしませう。いつちまつたわ。

ほんとよ、今はもう好きではないの。好きつたつて仕様がななんですもの。これもにいさんのせいなのよ。ちやあ、話すわ。

戦争の終りごろ、勤勞動員とかで、あたしたちみな軍關係に勤めなけりやならなくなつて、あたしは軍のお役所に勤めましたの。仕事も面白くなかつたんですけど。しばらくするうちにあたしの部屋の主任の大尉といふのが、とてもいやな

奴でね。あたしたち女の子のゐるところで、わざと兵隊たちをどなるのよ。年うへの兵隊など可哀さうでたまんなかつたわ。それがどうしたことか、あたしをつけ廻すやうになつたの。いやで／＼たまんないからにげまはつてゐると、いよいよひどくなつて、ある日、どこかの部屋で押問答をしてゐるところへ、そのひと軍属だつたけど、丁度來合はせて、「失禮」といつて出ようとしたけど、様子がわかつたのでせう。

「あなた勤務中でせう」といつて、あたしを去らして、それからどう話をつけてくれたのか、すぐ勤務の部屋がかはつて、その人の部下になつたのよ。例の大尉とは顔をあはさなくつてよくなるし、嬉しくてたまらないので、お禮かた／＼お菓子をもつてお宅へ御挨拶に行つたの。出て來た奥さんてのが、これがまたとてもいやなひとでね。挨拶もしないし、お茶もろくすつば出さないで、追拂はれたの。翌日、お役所で、昨日の失禮を詫言ひられてから、いろ／＼奥さんのこと聞いてるうちに氣の毒になつてしまつたわ。「可哀さうとはなんとかつてことよ」つてシェークスピアにあるんですつて。年も三十過ぎの奥さん子供のゐるそのひとが好きで／＼たまらなくなつたの。

北海つて公園のやうなとこや、紫禁城などお役所がひけて

からよく一緒に行つたわ。うそよ、體の関係なんかありやしないわ。親嘴ぐらゐしたかもしれないけど、親嘴つてわからない。わからなくていよ／＼結構よ。

そんなんでお役所の仕事も、わが軍の形勢いよ／＼非なりもなんともないうちに、八月十五日でせう。それからすぐ動員解除、うろ／＼してゐるうちに外出差止めでせう、もう會へなくなつちまつたの。仕方がないから電話で話したわ。それも父や母がよこにゐると何もうへないでせう。暗號をきめておいて、

「違ひます、・・・番ですよ」

といふのが、よこに人がゐて話せないつてことなのよ。苦勞したでせう。まあ、どうやら聲だけ通じますけど、會へないのがたまなくなつて、にいさんに相談しましたの、かうかういふわけだから、にいさんのお友達つてことにして一度家へ來さしてもらへないかつて。にいさんいやな顔をしてあたしを睨みつけてから、

「おまへ本氣か」

つていふの。本氣だつていふと、奥さんよりも子供が可哀想だといふの。別に子供を離す氣などないわつていふと、

「それちやお妾になるのか」

つて訊くの。どうして、かうわからないんでせうね。戀愛と結婚とは別ぢやないの。結婚しない戀愛なら、お妾商賣になるつて、まるで徳川時代ぢやないの。ともかく一度その男に逢つて來る、つていふから、危いとは思つたけど、家を教へたわ。その翌日だつたかに出かけて行つて、歸つて來ると

「話をつけて來たよ」

つて云ふの。

「どんな話」

つて訊ねると

「奥さんはなるほど感じの悪いやつだね」

ですつて。そこまではよかつたけど、子供たちは可愛かつたから、あのひとに子供たちと別れることはお止しなさいつていふと、もちろんそんなことなど考へてないつて云つたつて。そこで

「あれの母親は武家そぢで、むすめに變なことがあれば、殺して自分も死にます、つて申しますから、今後はご縁がなかつたものと思つていたゞきたら」

つて、云つたら、

「仰せに従ひます」

つて、すなほに返答したんですつて。意氣地ないつたらあり

やしないわ。電話のこともいつて來たんですつて、ご念の入つた話ぢやないの。あたし腹が立つて／＼たまらなくなつて「にいさん、たいへんやきもちやいたのね」

つて云つてやつたわ。え、本當よ。にいさんはあたしに別になんてことないくせに、やきもちやいたんだわ。それから電話はあたしの方からかけるだけよ。最後は引揚げのためつて、西郊に集結するとき、かけたきりよ。いまですか、ペーピンに残つてるんぢやないでせうか。こちらのところも教へておいたのに何ひとつつて來ないのよ。ほんとににいさんが怨めしいつたらありやしないわ。あたしのこの一念だけでも、幸せになれやしないわよ。戀愛もしたことないんでせうね。三十にもなつて、馬鹿つたらありやしないわ。

さう／＼、電話で思ひ出しましたけど、にいさんにもお手柄がひとつあるのよ。あたしの姉が天津にゐましてね。婿も終戦まぎはに出征するし、臨月なもんですから、家ちうで心配しましたのよ。にいさんがそれを聞くと、電話をかけて見たらつていふの。かゝるかどうか半信半疑で、長距離を申込むと、三十分しないうちにかゝりましたの。姉のこゑもそのままですし、姉婿は現地除隊になつて歸つてることがわかりましたの。狀況はどうだと聞くと、やはり外出は遠慮つてこと

になつて居けれど、こちらと違つて日本人は租界にかたまつてゐるのさびしいことはない、そのうへ婿の商賣が醫師ですから、開業をつゞけてゐるんですつて。母がお産の手傳ひにゆくところだけれど行けないつて、ことわりも通じましたし、豫定日などもわかりましたのよ。

電話のきれたあとでも話は中々つきまませんでしたが、母が折角に仕立てた赤ちやんの着物が間に合はないつて嘆くと、にいさんはそいぢやとゞけてあげませう、つていつて、翌日例の友だちのところへ訊きに行つたわ。何でもそのひと中國人の服装をして、中國人の友だちをひとりつれて行つて來たんですつて。大體の様子がわかつたといつて、例の買賣人の服装をして、包みをもつて出かけましたわ。

一週間ほどすると歸つて來て、旅行の話をしましたのよ。何でも切符賣場にならんとすると、ヤミ屋が一割増かで賣つてくれて、すぐ開札口を通ると、巡警によびとめられたんですつて。迂散臭い恰好をして大風呂敷をもつてゐるからせう、あけて見せると云はれたので、あけようとしながら、ふと「我是日本人」

僕は日本人ですといふと、さうか通れとすぐ通して貰へたんですつて。それでわかつたといふので、歸りは協和服つて申

「おまへ英語が話せるね」

といつてすぐ通してくれたさうですよ。アメリカ人つてそんなこと自由でいゝわね。そいでにいさん大喜びして、すぐ失敗やつてしまつたんですつて。うれしくつてたまらないので

「サンキュー」

つていつて、握手しようとしたんですつて。握手に手を先に出すのは、上位の者の方のすることせう。アメリカの兵隊はそれでも手を出してはくれたけれど、にいさん「しまつた」と思つたつていつてましたわ。そんなことだけが失敗で、天津行も無事はたしてくれて、父も母も大喜びでしたけど。ええ、赤ん坊はそのあとすぐ生れて男の子だつたんですの。やつぱり引揚げて來て、近くにゐますわ。可愛い子ですけれど、あの、出べそなんですよ。母がくやんで、年寄りがそばにゐないとこんなことになるつて、云つてますの。なんでも切つたあと、若夫婦ちやどうしていゝかわからないで、いかげんにしておいたんですつて。お姑もゐた方がいゝものかもしれませんわね。

さう／＼、にいさんの方は、毎日、出歩いてましたが、うちでは父は會社の接收がすんで、何千人もゐる大會社でせう、

しますか、國民服ね、あれを着て天津の西站へゆくと、進駐軍が一行にならべて旅客を検査してたんですつて。はじめの検査のところはなにもなしにパスして、次に巡警のところへゆくと、

「あんた日本人でせう」

つていふの。

「勿論、日本人です」

といふと、

「進駐軍にはわからなくつても、わしにはわかりますよ」つて得意だつたさうです。協和服なら中國人は着ないんですもの、あたりまへなのにな。それで

「日本人ならいけないですか」

とたづねると

「居留民團の旅行證明書をもつてますか」

と問はれ、もつてないつていふと、それぢや駄目、次にお金はいくらもつてゐるかつてきかれて、五千圓もつてると答へると、千圓以上もつて旅行するにはまた證明書があるつて云はれたんですつて。そいであきらめようかと思つたけど、そんなわけにもゆかないので、煙草を吸つて、あすこの進駐軍に話してみる、つていつて、また先の進駐軍のところへゆくと、

従業員たちもだん／＼生活に困つて來るのがわかりますし、

このころになると、いつか日本へ引揚げさしてもらへることもわかりましたので、それまで、西郊に集結することになりましたの。もとの兵舎で共同生活することになつたんですの。

にいさんの方は、除隊したまゝで、居留民團にも届けいでしてない無籍者ですから、「どうする」つて父がたづねますと、にいさんは

「僕にはかまはないで下さい」

つていひますの。

「ペービンの邦人でおれたちは第一番に日本へ歸れることになつてゐるんだぜ」

と父がいひますと、にいさんは

「僕は日本へ歸りたくないんです、歸つてもしやうがないんです」

つて、思ひつめたやうな風にいひましたのよ。

「どうしてだ」

と父がたづねますと、食糧事情のことなどいつてましたが、問ひつめると

「歸つたつて、父も母も生きてませんし」

といひます。馬鹿ねえ、現に生きてゐて、あなたも會つて下

すつちやありませんか。

「どうして生きてないことがわかる」

つて父が聞きますと、

「僕は内地から来た最後の部隊で、空襲のことなど一等級よく知ってるんですよ。三月の大空襲のあと、焼跡へ行つてみたら、震災の時よりもひどかつたと思ひます。省線の〇〇の驛だつたんですが、改札口のところからプラットホームまでぎつしり人が並んで死んでましたよ。着物などすつかり焼けて、男か女かわからなくなつて——その中には僕の知つてゐるひととまぎつとゐたと思ひます。父の家のあたりも終戦直前に焼けたつていひますし、その後、便りのないところから見ても、年寄り二人ともゐないときまつてます」

つて云ひ張りますの。え、〇〇つていひましたわ。へえ、お宅はあの驛のすぐ御近所だつたんですの。

「それぢや、どうするつもりだ」
つて訊ねますと、

「八路の放逐では、蒙疆では日本人の引揚げたあとに、子供が二十八人残つてゐたさうです。早く引取りに来いつて云つてます。引揚げ命令が急がせすぎたせいもあるんでせうけど、子供を置いて来るなんて、あわて方も考へられない位で

すね。僕はその子供たちの世話をさしてもらひに、八路へ行かうと思ふんです」

つていひましたわ。八路つて中共軍のことなんですよ。つて、父もすゝめ分とめましたけど、一向きませんし、内地の様子がこんなだつてことはあたしたちも自信がつきませんでしたので、結局勝手にしろつてことになりましたの。

そのころ西直門からは毎日、八路行のバスが出てゐたさうですから、にいさんはそれに乗つて行つたんですわ。西直門で、ペービンの西北の出口で、蒙疆からの駱駝などよくこゝから入つて來ましたわ。あたしたちの集結もそれからすぐで、やはり西直門からトラックの荷物の上につて出ましたの。景山つて、紫禁城の北の山がだん／＼見えなくなつて行きますの。そのすぐ西が北海でせう。あのひとのことなど思ひ出して、あたしは泣きましたわ。

集結地の向ふの萬壽山に八路の陣地があつて、日本人もずゝ分ゐる證據に、おしめなど乾してゐるのが見えるつて、云つてましたから、にいさんたちもそこにしばらくゐたんでせうね。え、十一月頃で、もう寒くなつてましたわ。歸つて來たのが二月でしたわ。まあ、内地のありがたさだん／＼感じ

ますし、この通りお金さへ出せばお米にも、おしるこにも不

自由しないんですものね。にいさんはつく／＼馬鹿だと思ひ

ますわ。もう一生歸つて來れませんわ。伯父たちも氣の毒

ね。父にはどうしてむりにでも引張つて來なかつたかつて、

いまでも怒つてるのよ。でもいまお話ししたやうな始末で仕

様がなかつたんですわ。

あなたもさうおつしやるの。だつて御本人が大學まで出て

ゐながら、あゝ判断がまちがつて、そのの間違ひつてこと疑

つてもみないんですもの、仕様がないうちやありませんか。あ

たしたちが水臭かつたつてことよりも、にいさんの馬鹿のせ

いよ。

あらさうでしたの、あなたににいさん好いて下すつたの。に

いさんも？」

そいぢや三月、あなたがなくなられたつて信じこんぢまつ

たのが歸つて來ない原因ね。わかりましたわ。きつとさうで

すわ。まあいよ／＼馬鹿ね。

でも馬鹿、馬鹿つてばかりいつてごめんさいね。

× × ×

投稿規定

- 小説 四百字詰 五十枚以内 題材自由 但し未發表作品
- 評論 〃 二十枚以内 文藝或は社會評論 〃
- 詩 二十字詰 三十行以内 題材自由 〃
- 短歌 二十首以内 〃 〃
- 俳句 二十句以内 〃 〃
- 一、用紙は原稿用紙とし楷書のこと
- 二、原稿には住所・氏名・筆名・略歴を明記のこと
- 三、送附先 奈良縣丹波市町養徳社内大和文學編集部
- 四、期日 規定せず、毎編集締切日迄に到着の分より優秀作品を選択掲載し、以後到着の分は次集の審査に廻します。
- 五、原稿の採否は編集部に一任のこと
- 六、本誌に掲載の分は相當の稿料を呈します
- 七、原稿は一切返却しませんから必要な方は豫めコッピ―をとつて置いて下さい
- 八、發表は改めて通知致しませんから「大和文學」誌上で御覽下さい。

編集後記

☆大和は日本のアクロポリスだ。西歐の文化がアテネのアクロポリスから全歐に流れ出たやうに、日本の文化はこの地から流れ出した。當時においては關東も東北も大和の殖民地に過ぎなかつた。一度ヨーロッパが永い間ローマの殖民地であつたやうに。

☆そしてヨーロッパの近代文化はルネサンスにおいてギリシャ回顧の上に出發したといふ。同様に我々もまた新しい時代への發足の足場固めとして大和を眺めたい。世界史は復古精神が決して單なる復古思想ではなくて、新時代への陣痛であることの實例に富んでゐる。

× × ×

☆専門の英文學者たと共に小説家として名がある阿部知二氏が編著を傾けられた英國近代小説の始祖H・ワイルディングの翻譯小説を載いた。この十七世紀最大の問題小説は今日の時代にも新しい問題を提起するものと信じます。

☆第二集の原稿募集は大いに反響を呼んで全國各地からの応募作品を得、創作の中にも良い作品があつたが、種々協議の結果、今回は吉田愚弘氏(歌)と鎌谷嘉道氏(詩)を頂戴する事になつた。今後新進の活躍を大いに期待したいと思ひます。

☆投稿選評欄を設けるべきであつたが、本號はペーじの都台上残念ながら割愛せざるを得なかつた。今後優秀な作品については随時掲載するようにした。

☆第二集は種々の事情により刊行が大變遅れましたが今後は當初の計畫通り年四回發行のつもりであります。多數問ひ合せ状を寄せられた方々に誌上からお詫び致します。

☆雑誌は究極において讀者のものであります。種々御意見をもちの方はどうし、投書して戴きたい。大いに御希望に添うやう努力致します。

(吉岡)

「大和文學」の要件は左記へ

奈良縣丹波市町養徳社内

大和文學編集部

大和文學 第二集

定價七十圓 (送料八〇〇)

昭和二十三年七月十日印刷
昭和二十三年七月十五日發行

編集兼 東井三代次

奈良縣丹波市町三島
會費番號A二二五〇一五

印刷者 岡島善次

奈良縣丹波市町川原城
天理時報社

發行所 株式會社 養徳社

本社 奈良縣丹波市町川原城
振替京都二五六四八番
京都市中京區船場藥師通
室町西入

配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

文樂と歌舞伎の雜誌

文樂

古來傳統の
文樂と歌舞伎、能樂等の
古典藝能の研究誌として
特色ある内容を誇る

半年 180圓 (送共)

誠光社

日本橋區日本橋三丁目五番地
大阪府南區南船場三丁目

上司小劍選集・全五冊

既刊 第一冊・平和主義者

B6・二九〇圓

第二冊・蜘蛛の饗宴

B6・二九〇圓

第三冊・浪花節イデオロギイ

B6・三〇〇圓 定價未定

未刊 第四冊・女帝の悩み

第五冊・未定

大阪府東區十二軒町七 育英出版株式會社

春山武松著
大乘求道會藏版

螢光燈下の金堂壁畫

B5判二〇〇頁・原色挿入・寫眞十五葉

定價百五十圓 送料十圓

魚澄物五郎博士校閲
梅原末治博士跋文
石黒豊次編輯

法隆寺史料古今一陽集

A5判一〇〇頁・口繪一枚・本文十頁紙

定價百五十圓 送料十圓

奈良縣法隆寺西大門前

いかるが舎出版部

月刊俳句雜誌
俳句と文學 青垣

西村白雲指導・堤文蛤編輯
— 毎月上旬全國書店にて發賣 —

誌 一ヶ月 十五圓 五十錢
代 一ヶ年 百八十圓 送料共

奈良縣生駒町北新町
振替大阪一八四七四

農家の友社

大和文學

第三輯



養徳社圖書

文學博士

石田茂作

伽藍論攷(佛敎考古學)

定價 四〇〇圓

龜井勝一郎 大和古寺風物誌

定價 三〇〇圓

養徳叢書

柿 二 つ 高濱虚子著 二二〇圓

ウオルデン池畔にて ソロル著 二二〇圓

狐の詩情 蒲松齡著 二二〇圓

前川佐美雄
一千歌集
定價 五〇圓

朝鮮古文化綜鑑

第一卷 樂浪前期
第二卷 樂浪(乾)

定價 七〇〇圓
定價 一、五〇〇圓

刊 大和の古鐘

土井 實著

價 未 定

近 奈良の本

松本楢重編

價 未 定



¥.90

宗教と文學



實存の諸相

古野清人

宗教的實存の萌芽——ザギエル

日本キリスト教傳道の先驅者であるザギエルは天文十八年（一五四九）の八月十五日に初めて鹿兒島に足跡を印した。これはヨーロッパとの文化接觸の輝かしい記念日である。この偉大な東洋の使徒、崇高な耶蘇會士によつて、われわれは初めてキリスト教的精神性の洗禮を受けたのである。その後のめざましいカトリック傳道の進展と十七世紀初頭の徳川幕府による禁壓、迫害、それに伴うキリシタンの殉教は、日本宗教史上の異色ある出来事である。新に受容したカトリシズムに全生命を捧げて、祈禱と喜悅の中に磔刑を甘受したキリシタン宗門人の深い宗教的體驗は、強くわれわれの胸を打つものがある。

- ★ザギエル
- ★ドストエーフスキイ
- ★キルゲゴール

★宗教と文學（特輯）

- 古野清人 實存の諸相……三
- 赤岩 榮 聖書と文學……三
- 保田與重郎 宗教と文學の立場……一〇
- 諸井 慶徳 ロゴスとパトス……言
- 横田 俊一 ゲヘナの罪人……元

隨筆

- 野村秀子……望
- 緒方準一……望
- 高柳 章……望
- 松田 正 柏……望
- 松江 玉 翠……望

【翻譯】幽靈について

レツシング 山口繁雄譯……五

論 憑かれたる青春

寺尾 勇……空

評 へッセルと戦争

原 健忠……空

【繪と文】益軒の大和紀行（史料）

金井寅之助……充

【繪と文】美高畑の秘夢

小野藤一郎……五
奥田 勝……充

座談會 大和の文化

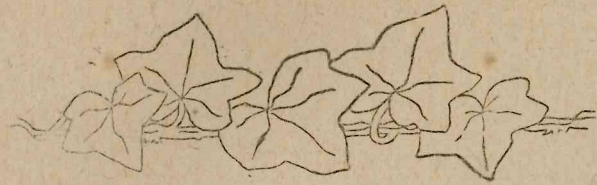
出席者 保田・前川・田中
中山・吉村・富永……吉

【創作】葬送曲（投稿）

關地耕三郎……金

☆投稿規定……

大和の文化



出席者

富永 永牧 館長

吉村 正一 郎

田中 克己

中野 正善

保田 重郎

前川 佐美 人雄

森田 忠己

鈴木 治己

司會者

鈴木 治己

山中と國中

鈴木 ではこれから「大和文化」とその現代に於ける意義」というような事で一つ大いに賑やかにお話しいたゞきたいと思ひます。まづ吉村さん、どうぞ。

吉村 難しい事ですな、こりや。鈴木氏に一つ「大和文化」の定義を言つてもらいましようか。

鈴木 定義と言うとどうも難しいのでね。「大和文化」の特徴がどういう處にあるかくらいからでも如何でしょう。

吉村 保田君どうですか？

保田 どうも漠然として居て……

鈴木 ではまず歴史的には。保田 歴史的に言うと、現在の

大和の習俗や生活環境では、足利時代以後のものが大體具體的な基本となつていますね。それ以上のものは精神的なものか、或いは遺跡ですな。

その習俗が大方に云うて「山中」と「國中」に分れて居ます。習俗から、ひいては人の考え方として

も、國中と山中に分れて居ます。國中と山中の区分は、柳本ぐらゐが平坦部の境になつて、大體汽車の關西線に沿う西南に曲る線によつて分けられるようです。この山中の氣風には、一體に南朝とでもいふべきものが相當残つて居ると思われれます。

鈴木 そういふ足利時代の基盤の上に大和文化が存在するとして、それが今の他の縣や地方に較べて、どういふ風に異つた文化となつて居るかですね。

保田 その方面の比較は色んな地方と時代を考えると、一寸はつきりしませんな。足利以前のものと高度な文化の問題は別として、どこの地方にもこの南朝北朝という對立關係はあるし、しかもそれが地方によつて随分違ひますからな。

この南北の對立と云うことはすべての傳統や習俗の上で考えられると思う。習慣、つき合ひ、言葉の節まわし、商賣のかけひき等についての考え方が違ふのです。私の今いる櫻井では、比較的兩方の人によくふれるので、歸郷つてからそんな事を痛切に感じています。

鈴木 成程「山中」と「國中」の對照というものは、たしかに大和の珍しい特徴ですね、今度はそれをまとめて、よその地方とどんな違ひがあるか？ 皆さんどうお考えでしょう。

保田 そうなると觀點が大部違つてきますね。もつと古い歴史や傳統からふれてゆく必要がありま

すね。

富永 一寸お尋ねしますが、保田さん、その柳本を中心にしてふり分けるといふ意味をもう少しはつきり――

保田 理窟もなにもなしに現象的に見てですね。

富永 するとまあ、どういふ點で？ それからその線を引くといふのは南北に？

中山 いや、東西にだらう。

保田 たゞそんな考え方がするといふのです。柳本を境にして寧ろ西北の方に引く線で分けられるでしょう。

吉村 具體的に言葉や習慣の違いを言つてもらえませんか。

保田 日常ふだんにふれる話題でも、考え方や發想が違ふのですな。

吉村 例えはどんな事ですか？

中山 例えは生活が違ふ。「國中」は農産地で「山中」は林業なんだ。

鈴木 山間でも東の山間と吉野の山間とありますが、東の山間はこれでも農業が盛んだし、吉野の山間は林業をしている。また賣藥などの商賣で出稼ぎも相當さかんではないですか。

保田 理窟もなにもなしに現象的に見てですね。

富永 一寸お尋ねしますが、保田さん、その柳本を中心にしてふり分けるといふ意味をもう少しはつきり――

保田 理窟もなにもなしに現象的に見てですね。

富永 するとまあ、どういふ點で？ それからその線を引くといふのは南北に？

中山 いや、東西にだらう。

保田 たゞそんな考え方がするといふのです。柳本を境にして寧ろ西北の方に引く線で分けられるでしょう。

吉村 具體的に言葉や習慣の違いを言つてもらえませんか。

保田 日常ふだんにふれる話題でも、考え方や發想が違ふのですな。

吉村 例えはどんな事ですか？

中山 例えは生活が違ふ。「國中」は農産地で「山中」は林業なんだ。

鈴木 山間でも東の山間と吉野の山間とありますが、東の山間はこれでも農業が盛んだし、吉野の山間は林業をしている。また賣藥などの商賣で出稼ぎも相當さかんではないですか。

保田 理窟もなにもなしに現象的に見てですね。

富永 一寸お尋ねしますが、保田さん、その柳本を中心にしてふり分けるといふ意味をもう少しはつきり――

保田 理窟もなにもなしに現象的に見てですね。

富永 するとまあ、どういふ點で？ それからその線を引くといふのは南北に？

中山 いや、東西にだらう。

保田 たゞそんな考え方がするといふのです。柳本を境にして寧ろ西北の方に引く線で分けられるでしょう。

山の邊の道

保田 山邊道は一番古い道ですな。山邊道の遺跡の残つて居るのは、北は丹波市の邊までですが。

中山 現在の上街道より約一キロ東、大體ですよ、和爾邊にも遺跡が残つて居る。

富永 天理圖書館の裏の道を山に沿つて、ずつと朝和村へのびる道です。

保田 商業でも大阪とか、京都とか出先によつても違ふ。

中山 この邊（丹波市）も吉野とは又變るが、林業もある。

保田 一樣に言うると櫻井線で劃つて山がわが「山中」風だと――

中山 奈良も含めてですか？

保田 奈良は別ですな。あれは中原、しかし結果的に北に勝つて居る。「山中」はまあ山邊郡の山間地帯と吉野・宇陀です。

中山 昔の山邊道ですね。

鈴木 すると山邊道の時代と言ふのは彌生式土器の時代ですね。

保田 彌生式土器と云うても出る地方によつて多少時が違ふと思ひますので、一般的にはつきり限定する事は出来ません。

前川 山邊道が外に出て上街道になつて来たのではないですか？

富永 雄略天皇の時だつたか、舟で行つたというから、山邊道以外は海だつたのじやないですか？

水が引くにつれて上街道の方に道が下る。

中山 それは海かなあ。河ではないかな。

保田 山邊道の時代は水が多かつたのでしよう。

吉村 山邊道というのはどうして出来たの？

保田 何ともなく、逐次できたのでしよう。

吉村 何か理由が………経済的でない？

保田 勿論経済的な理由、土地の開墾でしような。大倭朝廷の發展と三輪や兵主神社、大和神社をれに石上といつたものとの關係も考えられますね。

鈴木 山邊道は三輪から飛鳥の方へのびて居るのですか？

保田 道は三輪全屋どまりで、今の天理教の敷島大教會のところが古の瑞垣宮址で、つまりこゝが起點でしよう。山邊道から飛鳥へ移つた現象については、今われわ

いうのか？ 保田氏の意見はどうですか？

保田 そう、現在の習俗は足利時代ごろに形づくられたものですが、それ以前の昔のものも影響してますな。

中山 「大和文化」の解釋がはつきりしない。現代の文化人の中にあるものが「大和文化」か？ 古い遺産が「大和文化」か？ それをはつきりさせねばならないね。

——博物館で見るものか？ 今の生活の中に出て居るものか？ どつちが「大和文化」なのか分らん。

鈴木 どうも手酷しいな。(笑)

吉村 繰り返しますが、先刻の二通りの意味があつて、保田君の言う様に古い文化的遺産と足利時代に出来たものとは無關係に考えられないが、生活の中に生かされている文化でなく過去の文化財を問題にしようというのではないで

れが見る古典、古事記・書紀などですが、それにはその間の歴史的いきさつについては餘り書いてませんな。

鈴木 海榴市の歌垣で殺された、鮎の戀人のお姫様が泣きながら奈良の方へ行くとか云う書紀の話はその道でしようかね。もつと葛城の方かと思つていた。

田中 いや、海榴市は金谷だ。

前川 いまは道など残つていない。草の間に細道があらちこちにあるだけです。

保田 山邊道時代の大きい事件は日本武尊と倭姫命の旅行です。大體この時代から版圖が相當擴がつたのですが、どの邊まで行つたか一寸分りません。

その時代の中心はつまり金谷と三輪山、鳥見山、あの邊一帯の長谷川の溪谷ですな。飛鳥も餘り廣い平野じゃない。しかし随分澤山遺跡が残つて居ますね。以前、慶州にいつて見て思つたのですが、

鈴木 というよりも、過去の文化財と現在の生活のその二元的のものが兩方とも他の地方より特徴があるんですね。

吉村 二元的というところがこんがらがりますが、その二つのもの——現代の生活の中に生きているものと、死んでいるものと、話を二つに分けると、どちらを問題にしますか？

富永 僕はそれを更にこんがらがらせるかもしれないが、大和のものは、いわば總括的なもので、眞道で、何でも含んでいる。それに較べて、大和以外はすべて地方文化だといふようなテーゼから出發することはできないでしようか。

前川 そういふ前提で話したら面白いですが。

吉村 そりやそうだけれどもね。山邊道以來當分の間は大和が、日本の政治文化の中心になつていたのは事實だが、昔の話ですよ。

最盛時代の新羅の國內もこれと大して變らないほどの廣さです。

大和文化の定義

鈴木 特徴はこれ位にして、改めて「現代的意義」というものがすがね、例えば戦争の中頃から若い學生が赤紙をもらうと、一應大和へやつて來たりする。以來、今でもそういう気分が続いているが、その様なことが行はれるのは、こゝ大和だけの一つの大きな特徴じゃないでしようか。

保田 それは大和と京都を較べると分り易いと思う。

前川 それは僕のように大和に生れ大和に住んでいる者よりも、外から來たの方がはつきりわかるでしようね。

保田 京都にくらべて、大和のものの特徴はどぎつ、といふ言葉で云うとよいかと思います。雄大とか豪放とかいふだけのものではない。何か外に言い方があればよ

その後は文化の中心は他に移つて長い間大和は單に一地方に過ぎなくなつてしまつて居る。その過去の遺産が現代人にどう生きて居るかが問題ですね。

保田 そういふ意味で京都の文化と大和の文化とは、どちらがまつとうなものかといふのですか。

鈴木 いや、まつとう、まつとうでないは兎に角として、他の地方と比較して大和の特徴はどうでしよう。

前川 習俗的に見ると、東北の百姓の家をのぞくと、客が來ても座布団も食器もないが、大和では貧乏していても座布団や食器はある。これなんか大和が他地方と少し違ふ具體的な例ですね。

中山 僕はその話についてだが、それは一般概念で、大和人が通俗概念の文化人だと考えているのかな？

保田 通俗的な意味で、文化人と考えていないと思えますなあ。

いが、今一寸こんなことばしかありませんな。

富永 一つの考え方として、大和は歴史的に見て、初めから終りまで當事者であり、日本の文化の先頭を切つて、いわば全部の相を揃えているのではないでしようか。そういうものに接して、本當の日本の文化を探つて置きたい欲求からこゝへ來るのではないでしようか。

保田 そう考えても良いと思ひます。残つて居る遺品と云えば、みなそういう感じがしますな。

吉村 話を整理する意味で云いますが、先刻からの話は「大和文化」が話題になつて居るが、保田氏の話の、山邊道・飛鳥・奈良東の古い文化的遺品や遺跡と、現在、習俗として生きて居るものの文化と二通りある筈でしよう。その二つの文化の中、現代人の中に生きて何かの働きをしているものは足利時代に成立したものの遺品だと

古代史の影響

中山 大和は大和でも、平安朝・南北朝時代の大和となつて來ると、テーマは變つて來る。正倉院文化を一つて話さか、それとも今日の大和地方の古事遺習を話さかによつて、ポイントは何か違ふものを指している様に思ふんです。

正倉院文化は大和文化と言われているが、恐らくその時代でもその文化は一般大和人にとつては割合無關係であつたかもしれない。大和には本來大和らしい文化があると言ふ考えを前提にするか、それとも古い時代に創つた骨董的文化を高く考えるか、どつちかね。

保田 現在において正倉院と現代人の生活とは無關係かもしれないが、文化という點で關係が全然ないと言ひ切れない。

鈴木 そりや大いに關係がありますね。例えば、先刻前川さんのおつしやつた様に、大和では百姓

の家でも風流に出来てるんですね、家でも、着物でもです。大和の百姓の趣味は非常に洗練されていると私は思う。

保田 趣味とか風流を見ても、京都と大和とは違うし、江戸とも違います。同じ江戸でも元祿と文化文政で、男と女ほど違います。正倉院や白鳳時代もその違いというところに出て来ています。

鈴木 しかし今日も大和の農村では、矢張り泥臭い中に非常に洗練された趣味というものがはいつているのではないのでしょうか。

保田 趣味を意識して文化などとは考えていないが、そういう環境から文学なら文学というものを生んだ時に、その影響がはつきり出て来る。どんな風流かはともかくとして、それが生活の中に及んで来て、ある文化を生み出す場合に必ず影響して来ます。そういう時に法隆寺・白鳳時代のものが死物であるかないかすぐ分る。それ

らも現代の大和の生活に相當の影響を興えていると思えます。

鈴木 そりや死物でなくて、大いに現代に影響を興えているのですね。

富永 つまり萬葉集が前川佐美雄にどんな大影響を興えているか、ということになつてくる。(笑聲)

前川 兎に角、大和人が大和に影響を興えていることはあるんですが、はつきりとそれだとは自覺してないのですね。

保田 自覺せんでも、大和の家には、例えば唐招提寺と云つたものが必ずどこかに一寸出て来るんですね。

鈴木 驚くのはね、よく百姓が自分で大工して離れなどを建てる時にね、山家や数寄屋の形になつてしまふ。そんな所を見ると、所謂茶屋建築などは、大和の農民住宅の影響を大いに受けているじやないのでしょうか。

前川 三重縣の百姓が大和の農村の家が非常に良いと言つていた。そういうことがあるのです。所謂手元の形に現れた文化と現在の文化態度には時間のギャップがあるからむづかしいです。

吉村 僕はね、法隆寺だ正倉院だとか、つまり昔の貴族階級の文化だが、それが庶民階級の生活に影響を興え、今でも影響は續いているが、その過去の遺産を現代生活の規範にすべきかどうかと問題になると思う。

勿論ある意味で過去の文化的遺産というものは規範になるが、大和の古い文化という意味にとつて教訓になつても、そのまゝの形では現代生活の規範にはならない。

例えば法隆寺が出来た時は、その當時の最先端の文化をとり入れたものと思う。もしあの時エレヴェーターがあれば、聖徳太子はキソトそれを附けたと思う。それが

その時代の先端文化だつたという意味で教訓になるだろう。しかしそのまゝの形や様式をもつて来ることは時代錯誤だと思ふ。

保田 そうです。
鈴木 そりやね。家を建てる時東大寺の鴟尾なんか真似てつける、全くあんなのは意味ないと思ふ。

保田 それはまあ、東京や京都でしょう。
鈴木 いや、大和にも處々ありますよ。

趣味と節度

鈴木 そういうのでなしに、今の「大和文化」は總體的にいって古代文化の遺産というよりも、長い時代の歴史によつて洗練されてることと思うんです。模倣ではなしにね。

富永 洗練というよりも、今の吉村さんの話からではむしろローカライズされた結論することも

できるでしょう。大和のスペシヤリテイによつて、大和だからそんな大和風なものになつて、と。

吉村 そりやその、貴族文化のことを言うのですか？

富永 大和自體も大和の特殊な地位によつてローカライズされると考えられて来る。

中山 とも角古い方の文化と現代の遺産との間には時代のギャップがあるのです。例えば、ここに若い女の人も来ているが、頭の毛の先つちよをウエーヴかセットかカールというのか、そういうものをしてる。それは聖徳太子の頭のみずらに似ているが決してその流れによるものではない。

家も單的に法隆寺や唐招提寺を意識して住つて居るのかどうか？ローカライズされて来たかというのは大膽すぎるのではないかな。

保田 意識はないでしょうが、節度は生れて来るでしょうな。
中山 それはそうかも知れない

い。しかし、今の頭の恰好は昔の人に似て来ているが、違う所からいつて来ている。文化という言葉には色んな意味があるが、外からもつて来たものを、大和文化といえるかしら？

保田 それには色んな意味があるでしょうな。もし節度があればそれが文化でしょうな。

中山 その節度というのは？

保田 何かを受ける場合の節度ですな。非常なハイカラなものもそれを受け入れる時に、一定の節度をもつて受け入れる。單に外から来たものを真似るだけでなく、積極的に自己のものとして取り入れる。そういう節度ですな。

中山 そういうものが傳統的に繼承されているのでしょうか？
保田 節度というものを作り上げていく。養成というものは少し違ふ。

中山 しかればそれが生活様式全般に言えるかどうか。大和はむ

かしは新しいものを取り入れた。それが大和人の特徴であつた。もし假りに新しいものを取り入れるのが大和人の氣質だとしたら、それを直ぐに定義するのは少し早すぎるのではないかな、直に現代人にもつて行くのは大膽すぎると思うが。

鈴木 いやねえ、私の考えを言いますと、二千數百年の歴史の経験をもつしり積んでいるのがこの大和だと思ふのですが、それだけ生活にもまれている。ということはずべての點についてリアリズムが發達したということになる。

中山 しかし昔の遺物を除くと、大和にはこれという文化はないよ。

鈴木 それは例えば能樂などで、五流は皆大和に生れたが、今のこつているのは金春だけで皆な京都に出ていつてしまつたのと、同じ關係でしょう。

中山 それが先刻の文化として

高いか低いか、解釋の相違で、結論は出るが、それがどつちに基準を置くか？問題で、そう云うものを稱して文化と云うかどうか。一貫性がない。……

田中 大和は私が子供の時に育つた河内や和泉と變らない處が多いです。

保田 和泉とは違ふが河内とは似ている。

中山 近くだから模倣して来たのだからそれがほど一般性があるかどうか。

鈴木 そうですかなあ、私はまた大和の農村が關東とちがつてゴチノ／＼かたまつて居るのが、朝鮮と非常に似ている。それがまた和泉の陶器村などと同じで、大和や和泉には國初時代からの朝鮮の影響がしみこんでいるように思えて仕方がない。

中山 大和は和泉よりも河内に似ている。しかし生活様式が似ていても、言葉などは違つて居る。

たとえばラリルレロの發音なんかは、河内では水のことをミルと言ふ調子だ。あれは大和にはないですね。

保田 色んな實際生活を見ていつたらそういう感じが起るのですね。その觀點によつては區別があるといえはあり、ないといえはないといつたものですね。

逃避と療養

森 「大和文化」の問題はそれ位にして置いて、その「現代的意義」の方は如何でしょう。

日本人は誰でも大和に對して一種の郷愁というふうなものを持つてゐるのではないのでしょうか。天理教でも、丹波市をお地場や親里と呼んでいますが、殊に敗戦後は東京の様な混亂したパンパン文化から逃避したい、現に丹波市にやつて來る若い男女の信徒が近頃ますます殖えていますし、古寺巡禮に來る學生も増えた様ですが、社

會の風波の避難先として大和を求めるといつた氣持があると思ひます。

そういう意味合で「大和文化」

に「現代的意義」があるとすれば單に逃避としての消極的意義に止まるか、或は又何らかの積極的・建設的な意味があると考えられるか、そういった點をいろんな面から二ツ。

吉村 實際この頃大和へ來る人達に若い人が増えてるんですか？例えはお寺へ行つたりですが？

保田 増えました。

吉村 何時頃からでしょう？

保田 この前の世界大戦後、それからナチスの勃興する直前にも流行りました。その頃は和辻さんの「古寺巡禮」です。ところがその頃の大和の學生の興味は美術よりも考古學だつた。全国的に古美術がはやりました。しかしその頃に較べると今はもつと流行つてゐる。そこで、こういう種類のもの

が、現代に意義があるかどうかという事です。龜井の「大和古寺風物誌」なども若い人の間によくよまれています。

吉村 「大和古寺風物誌」はよくよんでいますね。

鈴木 そう。東京の人間が奈良を知つたのは前大戦以後ですね。それを確立したのが志賀さんの奈良移住だ。しかし虚子の「斑鳩物語」それに里見淳の「若き日の旅」がその前驅で、歴史的なものだ。

田中 まるで廣告だな。(笑聲)

保田 最近若い人々の間に古美術趣味も増えたが、四十位の年輩人にも増えた。五十、六十の人も増えた。他の府縣から來るだけになし、大和の土地の人々も増えました。美學とか美術とかいつて、あつちこつちの村にさえいろんな會が出來てゐます。

吉村 そういう傾向がねえ、目立つて來たのは茶道の流行などと本質的には同じ性質のもので、或

る意味で無理はないんだが、戦争が濟んで生活が困難になつてゐる、色んなものが混亂状態になつて秩序がない。戦争中は忠君愛國という一つの秩序があつて、統一されてゐた。それがなくなつて、今度は新しい秩序を作るわけだが、それを今デモクラシーと言つてゐるが、デモクラシーでは漠然として、とりとめがない。何かまとまつて秩序を求める感覺がある。それを求めあこがれる心理がある。

ところが現實の社會生活ではこれを満足させるものがないので、古い時代の秩序という感覺にあこがれたりする。古いものは千年も永い星霜を生きた長らえて來たものだけに、安んじて身を委せて、頼ることが出來るといふ氣持、つまり安定感がある。自分自身の中に安定感が作れないから、外にあるものに安定感を托したいのです。それともう一つ、日本人は自尊心を持つて來たが、戦争に負けて

自尊心がなくなつた。しかし、日本人も捨てたものでない、よい處があると思ひたい。兎も角、自尊心を持つていたい。今まで持つて

いたものを捨てて平氣でおられる譯がないから、日本にも何か價値のあるものを考えたい。そうなる

と勢い、現在では對抗できないから、古いものを選ぶ。傳統的な建築とか美術とかに向かうという傾向が出來る。

概して云えば、逃避的とも云えるでしょうが、一應は魂を休息させたいのだ。現在生活が索漠としてゐるから、そこにはいたゞまれない、休息させたい、といつて昔の様に西行や良寛や陶淵明の眞似は出來ない。昔なら社會との隔絶ができたが、今日ではとにかく配給物を取りに行かねばならないからね。良い悪いは別として現實が

よ。

中山 そんな隠遁生活をやつてゐるものがあるかも知れん、數は少いかも知れんが。

田中 休息よりも療養だな。

中山 しかし目的を療養だけに

とつてはいけないだろう。

吉村 自覺してやつてゐるのではない、むしろ無意識にやつてゐるのだから。

巡禮と觀光

森 しかし「大和文化」を逃避的にばかり考えたくないな。投機して失敗し振出しにかえる。それが大和だといえないかなあ。

鈴木 それがつまり田中君の「療養」さ。

吉村 ところがね、そういう氣持の人もゐるかも知れないが、そ

ういふのは間違いだと思ふね。普通われわれがいう大和の文化といふのは要するに昔の宮廷中心の貴族文化でしょう。ところがね、今

そういう貴族社會、貴族文化をつぶそうという時代なのにそこまで戻つては行き過ぎだ。

田中 貴族的庶民的という問題は少しおいて、文學・美術という面を考へて見ると、大和は古事記・日本書紀・萬葉集の生れた地盤であり、法隆寺・藥師寺・唐招提寺・東大寺等の壯麗な建築物やその中に秘められた、美しい彫刻等は明らかに人の胸を打つものだ。そういうものに接して、少しでも

自己を高め、清め、美しくありたいという願望を満たしたいとの要求からじやないでしょうか。

保田 意識的に考へて大和へ來る人たちは今の話の通りといえるでしょうな。

中山 事實上の問題として大和に來る人が多いのが近頃特に目立

ちますね。現象のみでいえるかどうか知らんが、世の中に安定感がなくなつた時には巡禮が流行つてゐる。たとえば徳川末期には非常に巡禮が流行つた。西洋でも十字軍の時代は巡禮が多かつた。過去の歴史の波の上にそんなことが幾つもうかがわれる。不景氣になつても活動や芝居は景氣が良い。これも同じことで、その起りは家中にじつとしておられないから、社會的にも混亂してゐるし、自分自身でも落着かず靜かに思索する氣分になれないのじやないか。

だが、大和に來る人が多くなつたといつても、必ずしも大和だけに澤山集つてくるのではないのではないかな。戦災から免れた場所に集つて來たために、少しは多くなつて來たので、安定感を失つたのと、戦災のためと、兩方の意味からそういう現象が生れたのではないかな。

田中 たしかに巡禮的という意味もありますね。

吉村 まあ古い文化には多少に拘らず価値がある。歴史的な意義は必ずある。しかし古代遺産が貴族の文化だったということも考えなくちゃ。

鈴木 しかし古いものの現代的意義となると、それは發生の問題とは別でしょう。ギリシヤ人の宗教は否定してもギリシヤの建築美術は肯定する。

保田 もつと樂な方を云つた方がよい。兎にかく、文展を見るより大和の古蹟を見る方が面白い。近世に入つてからの「大和文化」の中から生れたモニュメンタルなもの、代表的な例を二つあげたら、下河邊長流と柳澤淇園(柳里恭)です。これは一例ですが、これらの人達の業績や人柄をみると、大和の歴史や傳統や習俗といったものの中から生れるものが、どういふ形のものか、どういふ新

やはり東京のパンパン的文化に生きた方が現代の新しいものが見つかるか、またはそれでは駄目で、パンパンを離れる方がいゝか、どうでしょう。

吉村 そりやね、僕だつたら好んでパンパン地帯に出ていって、苦しんで満員電車にぶら下る眞似をしなければ現代感覚がつかめないといふことではシンドイ。(笑聲)馬鹿々々しくて問題にならない。大和の風物を羨しいと思う。それはそれでいゝ。文化や藝術は創造ですからねえ、他人の作らなかつたものをつくることですからねえ、學問だつてそつたと思ふ。人のやらんことを、新しいものを作り出す意慾を妨げるのなら害はあるが、そうでなければ益になる。漠然と無自覺に陶醉しているのは知的でないが、そういうことを承知の上で好きになつてゐるのは差支えないでしょう。

中山 一つ思い出した。そう、

しいものか、どういふ風に氣がきいてゐるか、そういつたことがわかると思う。二人とも多藝多能ですが、長流は古歌の解釋に全く困難を打破した偉人ですし、淇園の畫の美しさなども全く近代的な感覺をもつてゐる。

鈴木 私もこの間「近世畸人傳」をはじめて見ましたよ。

前川 正倉院、法隆寺は別として、たゞ大和にあこがれを持つて來るものがある。東京はいわば主體的だが、さわがしい。しかし僕のようにこゝにゐるものはやり切れない。しかしやり切れない處、これも良いじゃないですか。

中山 その一例として、ある人が、以前は法隆寺へ人力車にのつて菜の花の咲いている處を萬葉氣分を満喫し乍ら通つたが、今は電車やバスが出來たから萬葉の氣分がこわれた、ケシカランといつていたが、自分はこゝなつたことが非常に結構なことだと思つてい

る。つまり大和に住んでない人が來て、短時間で國立公園を廻るには、やはり文化の進んだ現在の方が良いし、住む方にしてもその方がいい。これは確かです。

田中 萬葉までいかないまでも「菜の花の中に城あり郡山」という菜の花までが、今は少くなくなつたのだ。

保田 最近菜の花も少し復活して來た。あれは昭和三年頃からだん／＼なくなつたのだ。

田中 そうか、なかつたのか。復活したのか。

中山 さつきの人の話では、電車がケシカランという。しかし大和に住んでいない人が一日で大和を見るにはそれより外ない。そんな言ひかたなら、一層のこと大和を全部昔風にして公園のようにして、髪をみずらのように結わして、税金をとらずに、遊ばせておくはかはないね。

鈴木 觀光局に教へてやろう

萬葉植物園

大上敬義



もしもし………
草刈籠をかけた園丁の猫背らしい聲が目がさめる。眩しい草に顔を埋めて考への切れた僕は睡つてゐたのだ。草の葉の露をこぼして顔をあげる

……入場券はお持ちですか？

園丁の肩先に鳥を抱いた池が光つてゐる。鳥には腹這ふ大樹があつてその股のところにふたりの少女が掛けてゐる。午前の空しさが僕の唇をもぐもぐさせる

……歴史の木蔭から見えぬ手に招じ入れられて忍び込んだ僕は外界を距てたこの一角の草いきれに目をつむつて僕の追手をやりすごしたと思つたらこれだ

……どうしてこゝへ這入りました？

いくばくかの紙幣に代る見えぬ手を僕はどういつてよいか判らない。(それは過ぎ去つたことだから) 園丁はさういふ僕を引つ立てるほか仕方がないのだ

か。(笑聲)

森 そういへば大和の自然は非常に美しい、山の線が非常にやはらかい。

中山 私は家をはなれて高校や大學に通う時になつてはじめて大和のよさがわかつた。それまでも油繪の風景畫的なよさは判つていたのだがその頃になつて日本畫的な、氣分的な意味の、よさが判るようになった。自分たちの抱負なり、誇りなり、喜びから考へて、何かあるような氣がする。

吉村 そりや古いもので現在とは直接結びついていないでも、感覺的に見て美しいということは否定できない。美を感じるということに、精神が影響を與えられる。尤も直ぐ役に立つということは考へたくないが。

大和文化とパンパン文化

森 現代に生きている我々には

十年前のことですが(笑聲)ハワイで偶然に日本人の會合に行き合せて、日本はどうだと聞くと、いと答える。歸りたいかと聞くと、日本へは一へんは行きたいときつと云う。では日本へ歸るかときくと、歸りたくないという。アナンに住みにくいところは見物にはいいが、住みたくないという。ハワイの生活はとて樂で、つまり日本は旅行や見物にはよいところだといつていた。一般概念的にいつて、ハワイの文化と日本文化のレベルは、日本文化の方が上であるが、そこでも問題の基準は生活であつた。パンパンの中で住んでいるのがよいか悪いかということだから抽象的に考へて、判断するのはどうか。早い話が、もし東京の人が全部こちらに集つて來ればどうなるか。こちらの資材もなくなるしお江戸は武蔵野にかえる。今度は大和がパンパン的なさわがしさになる。(笑聲)

前川 大和の文化はそこでやりきれなくなつた時にあたらしい大和 cultura が生まれるでしょう。保守的かもしれないがどうにもならぬ。

保田 考える者は文學でも文化でも一人で負うより他はない。

中山 ぼくはそれでいゝのだと思う。

森 大和も歴史的に見ると決して古臭いところではない。つまり法隆寺エレグエーター式に、今日でも時代の尖端をゆくつもりがあつていゝわけですね、最後に結論を出すために一つ、戦後頽廢混亂の文學が現はれているようですが、新人出よという場合、そういう新人は東京へ出て行くが、か、またはこういう土地にいて勉強すべきか、こういう土地で勉強する方が本當の文學が生まれるのではないかということを一ツ。

吉村 大和に住む若い人は非常に注意しなければならぬ。大和に住んでもいゝ人は大和に影響されぬような精神状態、年齢になつた年頃の人の方がよい。一般にこの邊の中學生のやることを見ると、寺へ行つて拓本をとる。拓本をとるのはいいが、それは中學生がやらなくてもいいことで、それ自體はわるくないが他のことをやらなくするので、若い人にはもつと他にやることがあるはずだ。

古い文化は完成しているから、若い人が閉じこめられがちになるので、そうすると大いに弊害がある。大和の雰圍氣にまきこまれては若い人の持つ眞箇の要求は満たせないでしょう。大和の雰圍氣を享受しながらそれからはみだすことが出来ればそれでよいのだが、そうでなければ弊害がありますよ。前川君だつて若い時はいかにつた。(笑聲)

前川 東京にいと周囲があれだから何かやるようになるが、ここにいると何もしない。これで充分になつてしまふ。奈良はとろんとしていたので、こつちもとろんとして了つて、よつほど何かないと勉強しないでですね。

吉村 ところがね、又こういうことがありますよ。東京へ行くでしょう。みんなのやつていることを見ると、いそがしそうに毎日歩きまわり、試験會へ行つたり、座談會に出たり、方々へ引つぱりまわされていると、何かやつているかのごとき錯覺をおこす。東京にいるとそうなります。が實は結局何もやつていないのだ。そのことを思えば、こつち静かな美しいところに住んで、よく自分や自分のやることを見つめながら勉強したり、仕事をやる方がうんと良い仕事が出来るといふこともある。

だからそれは人によつて違ふことで、混亂した處で勉強する人もあるし、靜かな落着いた處でない勉強できない人もありますよ。それは各々が、自分の性格や生活地盤等の最も自分に適當な場所に

身を置いて、自己の最大の能力を發揮したら、場所は何處だつて構わない譯ですね。

鈴木 ではこの邊で、觸れるべき問題には一通り觸れることが出来ましたように、誠に有難うございました。

(二二・三六・二六・和樂館にて)

◆ 藝德叢書

七ネカ	樋口勝彦	幸福への道	二〇圓
グナグ	グナグ	情熱の倫理	二六圓
グナグ	幸田露伴	修省論	二六圓
阿部知二	旅	人	二六圓
〔再版〕			
サント	アント	我が毒	二〇圓
小林秀雄			
岸田國士	チロルの秋		二二圓

(送料各四圓)



葬送曲 (投稿)

關地耕三郎

軽いヒル飯をすました山根は、硬い木椅子に身を載せて、たばこを吹かしている。それはいかにも、セカセカしているように見える。そう、彼は別に意識してセカセカしているのではないが、子供のときからの癖である。おなじ紙巻をくゆらすにしたつて、彼の喫煙をみてみると、なにか仕事でもしているふうに見える、本人よりも、見ている者のほうがセカセカした気分になる。そうした彼が、折折、うつとりした眼をして、何かを憶う容子をする。矛盾である。而もこの明暗の性

格は、今では日常の習癖となり、狭いこの社内、七人の社員に注目をよびおこしていた。

新星社は別に株式組織ではなく、職業からくる名稱で、經營者は山根寅男になつてゐる。だから社員ではなく店員であり、七人の店員の内、二十七になる八重子だけが女性である。男六人の中で、専屬人夫が四人。皆それぞれ四十を越していた。葬儀一切を請負うこの新星社に、電話が一つ。この電話が鳴ると活氣ある活動が始まる。今、電話が鳴つたのだ。

「はいはい。あ、左様でございます。はア……？一寸、聞きにくいんですが。え？ケイサツ？なんですウ？はい

編輯後記

☆「大和文學」の「文學」は、「文學部」の「文學」と同じだということ。つまり「文化一般」の意である。と同時にその立地条件によつてこれは一つの郷土文化誌といえるだらう。

☆しかし古臭い郷土文化誌ではない。「新しい郷土文化誌」という定義を如何すれば充たすことが出来るかを、我々は探求して見たい。そしてこの場合の根本イデーは一つの啓蒙主義でなければならぬと信じてゐる。

☆こゝに第三集を「宗教と文學」特輯とした。現下ひろく青年の魂をしめるこの問題輯に對して本誌の立地条件は當然こたへる資格があると考へられる。スタンダールのいう「自分の魂のことよりほかに考へることがなくなつた」環境そのものが存在しているのだ。

☆本誌に至つて遂に關地耕三郎作「葬送曲」を投稿創作中から採用することが出来た。最近になつて同君が和歌山の雑誌「ロマン」同人であることが判つたが、人物の動きだけをとりへて問題を運び、その間作者が妙に表面に出て来ないという、果敢なものがある。しかも作者はいうべきことをいつている。勿論まだ荒削りなところがあるが、それを採つた。

☆また詩は田中克巳氏の推薦により縣下郡山の犬上敬義君作「萬葉植物園」を掲載した。本誌は單なる新人發見よりも天下の文運に寄與せんと念願するものである。

(編輯部)

昭和二十三年十月十五日印刷
昭和二十三年十月二十五日發行

大和文學 第三輯

定價 九〇圓 (二十五圓)



編輯者

印刷者

製本者

東井三代次
奈良縣丹波市町川原城
會員番號A一二五〇一五
眞美印刷所
京都市上樺木町千本東入
昭榮堂製本所
京都市上樺木町千本東入

發行所

株式會社

養徳社

本社 奈良縣丹波市町川原城
支部 京都市中京區
蛸薬師通室町西入

配給元

日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九